GCOE ワーキングペーパー
次世代研究　29

インターパーソナル・コミュニケーションを通した潜在的公共圏の形成と維持の研究

― 韓国のソーシャルメディア・カフェ「アゴラ」の事例から ―

車 愛順
（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）

2010 年 9 月

京都大学グローバル COE
「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」
Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501　京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科
Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp　URL: http://www.gcoe-intimacy.jp/

１．研究概要

本研究は、インターパーソナル・コミュニケーションの場を潜在的公共圏という視点から検討するものである。目的はインターパーソナル・コミュニケーションが潜在的公共圏になりうるのかを検証することである。ここでは具体的に韓国のソーシャルネットワーキングサービス（SNS）の一種である「アゴラ」（Agora）（資料１）を取り上げ、その内部でどのようにリアリティが構築されているかを分析することにより、潜在的公共圏になりうるかどうかを検証する。

1-1　問題関心

韓国におけるオンライン・コミュニケーション行為に注目してみると、韓国のネチズン[1]は「インターネット＝公論場[2]」という図式が当然であるかのように捉える傾向がある。実際、アゴラのようなコミュニティに対して行った既存研究には「公論場としての○○に対する研究」と題目がつけられることがしばしばである。多くの先行研究は代表的なネット掲示板がオンラインの「公論場」であることを前提に、社会的に大きな影響を及ぼした事象[3]を対象として論じている。

すなわち、韓国における公共圏研究の多くは、コミュニケーションの場が公共圏であるかどうかはさほど重要視していない。したがって、アゴラに代表されるオンライン上のコミュニケーション・サービスが公共圏（韓国語においては公論場）としての潜在能力を有しているかどうかという問題が明らかにされなければならない。「インターネットは果たして公論場なのか」という問いは、近年韓国の多くの学者やオンライン・コミュニケーション関係者も抱いており、シンポジウムなどを通して、繰り返し議論されている。

本研究は、アゴラという事例研究をとおして、公共圏としての潜在能力の有無という問いに一つの貢献をなす試みである。

1-2　アゴラを公共圏として捉える意義

アゴラを公共圏として捉える意義は、次の 2 点ある。

①CMC（Computer Mediated Media）のインターパーソナル・コミュニケーションであることだ。

アゴラで行なわれるコミュニケーションは、マスメディアを介したマスコミュニケーションでもなく、生活空間に束縛された FTF（Face To Face）のインタラクション（相互行為）でもない。

この点においては日本の SNS や「２ちゃんねる」に代表される掲示板と共通している。しかし韓国では、ネットに基づく政治的文化が比較的強く存在しており、韓国で「討論の広場」といわれているアゴラはインターパーソナル・コミュニケーションに基づく公共圏を研究するうえで、適切な対象であると言える。

②先行研究に対する意義

アゴラを公共圏としてとらえる既存研究（たとえば、キム・ゴンウ（2009）、キム・テジン（2009）、オ・セウク（2009）、イ・チャンホ，ジョン・イチョル（2009）など）では、研究対象とするアゴラでのコミュニケーションを、政治的イシューを扱っており、かつ、デモなどのような現実社会での行動を呼び起こした場合に限っている。すなわち、結果的に現実的な公共圏を生み出した場合に限ってアゴラを公共圏として捉えている。したがって先行研究では、アゴラそのものが公共圏としての潜在能力をもっているのかどう

---

[1] 韓国におけるネットユーザーの呼び方。

[2] この語は日常的にも用いられる一方で、ハーバーマスの Öffentlichkeit（public sphere）概念の韓国における訳語の一つでもある。

[3] たとえば 2008 年の米国産牛肉騒動による大規模な蝋燭デモなど。

かについては、議論がなされていない。
そこで本研究では、政治的イシューとプライベート・イシューの両者を対象として分析を行い、それらのコミュニケーションの内部でのリアリティの構築のされ方を比較することで、アゴラそのものが公共圏になりうる「潜在能力」をもっているかどうかを確認する。

1-3　研究方法、及び対象

内部リアリティの構築を検証するために、一つは量的推移から見られる討議による合意形成の検証、もう一つは議論内容から見られる内容面での繋がり、すなわち議論参加者どうしの相互の働きかけによる議論の展開、仲裁などによる自制機能の有無などを見ていく。
具体的にアゴラの掲示文[4]を対象に事例研究を行う。
まず、政治的イシューを取り上げ、論調や議論の流れなどを分析し、次に、日常生活でのプライベート・イシューを取り上げ、同じく論調や実際の議論の流れを分析し、それぞれのアゴラ内部のリアリティを検証する。最後に、政治的イシューとプライベート・イシューを比較しながら、全体として「アゴラ」が公共圏たる潜在能力を有していることを確認する。
なお、取り上げるイシューは次のとおりである。
政治的イシュー　2009 年 11 月 11 日より話題になっている「女性志願兵制」をテーマに、アゴラにおいて検索された全ての関連する掲示文に対し分析を行い、また中でも議論が一番激しかった 11 月 12 日の掲示文「女性志願兵制？？　さほど効率的でないでしょう！！」を取り上げ、分析した。
プライベート・イシュー　2009 年 11 月 30 日より 12 月 3 日までアゴラのメイン画面の討論にあげられた「割り勘」を対象とし、その中でもレヴュー数や書き込みが多い「女性と食事し、気に入らなかったので割り勘をしたが、これは間違っているのか！」という 11 月 30 日の掲示文を選び、分析した。
なお、両方とも男女平等をめぐって議論しているため、比較可能であると判断し、２つの事例を選択した。

２．韓国におけるインターネット文化

韓国のオンライン・コミュニケーションを取り上げるにあたって、避けて通れないのがその文化的背景や諸概念であろう。

2-1　韓国における公共圏の概念

韓国におけるハーバーマスの公共圏[5]概念に対する理解は西洋的な公共圏と違い、それは「公共性」の文化的背景からうかがうことができる。すなわち、西欧においては政治を公共領域、家庭を私的領域とみなす公私概念の伝統が長い歴史をもつのに対し、東アジアにおいては家庭が公共性の基礎的な場とみなされてきた[6]。また、西欧的視角からは、東アジアの公共性を「家族主義」あるいは「儒教文化」のような大きな枠組みの中で統合的に捉える場合が多いが、中国を含めた東アジア三国における公共性には共通点とともにまた差異点も存在する。特に韓国において顕著に見られるのが、出身を基礎単位とする「ウリ（我々）」概念である。“公論場”という概念は、“公共圏”が日本ではハーバーマスのような西洋的概念として用いられるのに対し、韓国では一般に、私的権利が否定され、

[4] 最初に議題を提示する書き込みことを、掲示文と呼ぶ（資料 2）。
[5] 日本では「公共圏」という概念が研究者以外の人間には、さほど馴染のないものであるに対し、韓国では「公論場」という言葉は、研究者のみならず一般人にもよく知られている。ただし、研究者とそれ以外の一般人の間には大きな理解の相違がある。
[6] ユン・ジェス,イ・ミンホ,チェ・ジョンホン（2008）

「ウリ」という語に象徴される集団主義の表れとしての「皆が集って公論をする場」と認知されている。言いかえれば、全ての行動と判断の出発点を「自己」ではない、「ウリ」に置くという意味が含まれているということになる。すなわち、韓国における公共圏は、政治的領域だけでなく、いわゆる私的領域の中の不特定集団ともいえる「ウリ」も含まれているのである。これはハーバーマス的な公共圏とも違い、いわゆる東アジア的な「公」の概念とも重ならならない韓国独特の捉え方だといえよう。

したがって、本研究ではハーバーマス的な公共圏概念を基本的な軸とした上で、その分析対象の範囲は、韓国の公論場概念に基づいて、公私のイシューをともに扱うことにする。

2-2　韓国におけるインターネット文化

韓国のインターネットを扱うに当って言及すべき点は、韓国の独特なインターネット文化である。

なぜ韓国では日常生活のみならず政治参加にまでインターネットが多く使われているのか。それは韓国社会の根底に、既存メディアに対する不信感があるからだといえるだろう。

80年代中頃までの韓国では軍事独裁政治が行われており、言論の自由も統制されていた（国民が大統領に対する直接選挙権をもったのは1987年からである）。そのため、軍事独裁に対する言論の自由をめぐる市民の闘争は絶えなかった。このような民主化運動の中で、軍事政権の権力につき従い発展しながら偏った言論を行ってきたとされる既存のマスメディアは「言論権力」と呼ばれ、批判の対象となっていた。韓国でインターネット新聞が既存のメディアに匹敵するほどの信頼性と影響力をもつ大きな理由の一つは、この歴史にあるといえる。

2-3　「アゴラ」およびその制度的、機能的背景

「アゴラ」[7]は討論の聖地、韓国 No. 1 の世論の広場とも称され、ネチズンには「21 世

---

[7] アゴラ（Agora）は元々古代ギリシャ都市国家の広場の名前である。Daum は、都市生活の中核で、政治・経済・文化の中心地となったこの広場の概念を一つのサービス名として取り上げることによって、公論の領域を大衆化させたいという意思を表現している。

「アゴラ」は大きく四つのカテゴリに分かれており、各「討論」、「請願」、「ストーリー」（日常的な出来事）、「ズルボード」（ストーリーに加え、内容がよく表現できる写真もともにアップされる）である。ときには同じ事件、事象であっても二つのカテゴリにまたがり、議論されたり、あるいは時間経過とともに他のカテゴリに移動されたりすることもある。

討論はさらに 17 のカテゴリに分けられ、ユーザーは自分の意見や議題をその大きなカテゴリの中に収めなければならない。討論に参加する人々の専門性には欠けているかもしれないが、逆に議題をあまり関心のもてないユーザーにも知ってもらう機会があり、さらに自分の意見を述べさせたり、議論に参加させたりする可能性もまた大きくなる。また、多くのユーザーの推薦を受けたり、議論の中心になったりする掲示文を中心にベストを選定し、多くの人々に見られるように、アゴラのメイン画面の中央に掲載する機能もある。

請願サービスにはネチズンの署名を得て、社会的なイシューや世論に影響を与えようとする狙いがある。実際オンライン請願を通して、実社会の政策などに影響を与えることにもなり得るし、自分自身が世論主導者になり、討論を導き出すこともでき、このサービスはときには公衆の利益を代弁する装置として働くこともある。

「アゴラ」には特に管理者たる者はおらず、ただ掲示文の内容によって評価を得るという特徴がある。たとえば、「アンダンテ」というニックネームを持つ高校生が 2008 年 4 月 6 日に「李明博大統領弾劾署名運動」を提案する文を掲載し、それが結果的に 1 ヶ月という期間に 100 万名にのぼるネチズンの署名を得た。署名運動を通して明らかになった政権に対する不信は、その数ヶ月後の蝋燭集会を導き出す起爆剤ともなった。

ユーザーは社会的現象や情報に関するイシューについて、自分の考えを伝えようとするとき、書き込みを利用して参加する。実際、韓国において「書き込みジャーナリズム」という言葉がネチズンの間で

紀民主主義の聖地」とも呼ばれている。

アゴラは韓国の代表的なポータルサイト Daum が 2004 年 12 月より提供し始めたサービスである。「社会の全てのイシューをアゴラにおいて議論し、話し合いながら、声援も行う」「ネチズンは大韓民国の力」をキャッチコピーとしてサービスを提供している。ここでは社会全般にわたる分野と趣味、ユーモアまでもが公論の対象とされている。

アゴラは 2008 年 5 月からの米国産牛肉輸入反対運動に始まった蝋燭集会[8]、ミネルバ事件[9]などを通して、現実社会全般に影響を及ぼす大きなイシューをつくりだし、運動が展開する場となることで注目を浴びてきている。シン・ジンウク（韓国中央大学社会学科教授）は、アゴラのもっている最大の長所であり力の源であるのはスピードであり、蝋燭集会のときではわずか半日の間に、世論と戦略、戦術などが形成されたと指摘している[10]。実際、ブログやカフェの場合、トラックバックや書き込みなどで得られるフィードバックは比較的長い時間を必要とするが、アゴラの場合は多くのネチズンにより、リアルタイムでフィードバックを受けることができることが特徴とされている。

また、アゴラはポータルサイト Daum 内におかれ、企業の利益追求のために生成されたコミュニティ領域である。したがって最大の自立性を提供し、議論に対する規制を最小化させるとはいえ、企業利益を阻害する行為なら、影響を受けざるを得ないというのが事実である。実際、2008 年の蝋燭集会以後、一連の現象に触発された政府のインターネットに対する規制政策により、アゴラは Daum のトップページから消えた。このように「アゴラ」はポータルサイトの中の一サービスであるため、その責任は同じポータルサイトが背負うことになる。社会的影響力や責任、新しい言論機関としての役割のため、政府によって強力な阻止処置や制限を強いられているのも、公論場としてのアゴラのもう一つの側面である。

3. 考察、および得られた結果

3-1　政治的イシュー　「女性志願兵制？？　さほど効率的でないでしょう！！」

3-1-1　意見と論調の量的推移

この掲示文は 2009 年 11 月 12 日の 21:15 に掲載されたもので、全体的に掲示文投稿者の意見に対して反対の意見が圧倒的に多い。すなわち、女性志願兵制に対して賛成する人が多い。

この掲示文に対する書き込み数は表 1 のとおりである。

表 1「女性志願兵制」に関する掲示文の書き込み数

日　付	11/12	11/13	11/14	11/15	11/16
書込数	7	284	4	3	4

使われるほど、書き込みは重視されている。また、グォン・サンヒとキム・イクヒョン（2008）は、積極的な書き込み活動をしなくても「読む行為」を通して、それなりに世論形成過程に寄与していると指摘している。

[8] 2008 年韓国で行われた米国産牛肉輸入再開反対から始まった一連の集会デモで、日没後に行われ、参加者が蝋燭に火を点けて集まったことから「蝋燭集会」と呼ばれる。約 100 日間続き、牛肉輸入問題から教育問題、朝鮮半島大運河構想、公企業民営化反対など李明博政権に対する批判と退陣要求へと争点が拡大した。

[9] アゴラで「ミネルバ」というハンドルネームで、経済関連掲示文をネット上に書き込んでいたネットユーザが、「偽りの事実を流布した罪」に問われ、警察に拘束された事件。彼は経済関連掲示文の正確さが多くのネチズンの支持を得て「経済大統領」と呼ばれていた。実際、彼の掲示文により、外貨市場が不安定になり、政府はそれを安定させるため、20 億ドルも損したとも言われている。

[10] キム・ゴンウ（2009）

表 2 「女性志願兵制？？　さほど効率的ではないでしょう！！」の書き込みに対する論調

書き込み数：302

賛成: 24(8%)		中立:124(41%)			反対: 123(41%)		その他
討議的賛成	表出的賛成	仲裁 (12%)	無関心 (12%)	ジェンダー (17%)	討議的反対	表出的反対	10%
3	21	35(28%)	37(30%)	52(42%)	52	71	31

論調について：「女性は軍隊に行くべきではない」を「賛成」に、「女性は軍隊に行くべきだ」を「反対」にし、また、主張の根拠が述べられている場合は「討議的」、単純に賛否だけを表明した場合は「表出的」とした。両論併記、客観的な指摘のような仲裁、イシューに直接かかわらない単なるジェンダーを巡る非難、および無関心も含め「中立」とし、このイシューとまったく関係ない書き込みは「その他」とした。

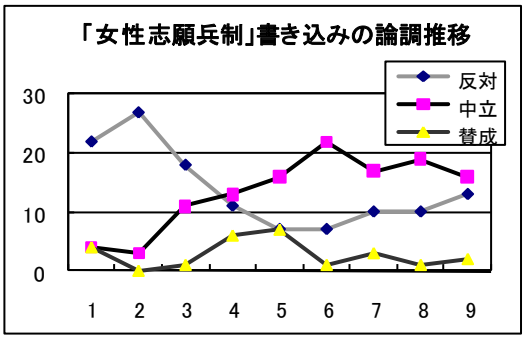

図 1 「女性志願兵制」書き込みの論調推移

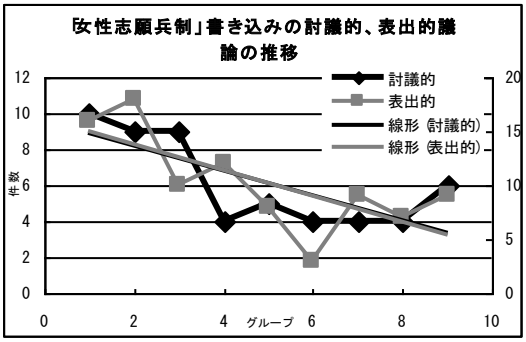

図 2「女性志願兵制」書き込みの討議的、表出的議論の推移

掲載翌日 13 日の書き込み数は顕著に多いが、他はごく少数である。これはイシューに対する関心が一時的に集中していることを意味する。また、本事例における基礎データは表 2 と図 1 のとおりである。

各意見の推移のグラフ（図 1）を見ると、全体的に賛成意見が少なく、その変化もさほどない反面、反対意見が著しく減っていくとともに、中立意見が増えていく様子がうかがえる。

また、時間の流れに伴う書き込み件数をグループにした、議論の流れを見るためのグラフを図 2 に示す。本話題とは関係のない「その他」を除いた 271 件の書き込みが対象になっている。横軸は 1 グループあたり 30 件ずつ刻み、散布図で現した。議論の傾向性を見るため、近似直線も求めた。討議的議論および表出的議論の書き込み数の顕著な差のため、縦軸を 2 軸にした（いずれも左軸が討議的、右軸が表出的である）。

図 2 を見ると、表出的議論が少し不安定である反面、討議的議論は最初は減っていくが、中盤に入ってからは落ち着き、最後は増えていく様相を見せている。また近似直線からわかるように、全体的に論理的、表出的議論は右下がりになっているが、討議的議論がより傾きが小さい。

したがって全体的に討議的議論が増えていくまでは至らなかったが、討議的議論の流れが表出的より優位に立つ点、また最終的に討議的議論が右上りになっている点においては、少しながら討議による合意形成の傾向が見られる。

3-1-2　議論内容の連関

女性志願兵制に関する書き込みの内容から得られた結果は以下のとおりである。

1. 論調を分析した結果、反対と中立がほぼ同じ 40%代、賛成はわずか 8%で、賛成、反対は大きな差を見せている。具体的な内容を見ると「軍隊に行ったことがないならつべ

こべ言う資格がない」「今軍隊にいる女性は女性じゃないわけ？」「軍隊と出産を一緒にするな！」など、この記事の論調に賛成する（主に女性側の）わずかな発言に対して、激しく反駁する反対側（主に男性側）の主張が多く存在し、ジェンダー対立の様相を見せている。

2. 上述したように、図 2 からはごく僅かであるが、討議による合意形成の傾向が見られた。表 2 の中立は仲裁、無関心、ジェンダー[11]に分かれているが、中でも仲裁と無関心はほぼ同じ割合を占めている。また仲裁や無関心とは別のカテゴリとして捉えられるジェンダーは間接的に本話題にかかわっていて、男女が互いの立場を批判する書き込みが反復し、続けられている。仲裁は割合が少なく、自制機能を持っているとは言いがたいが、無関心とほぼ同じぐらいで、圧倒的に多い反対意見に対し、その行き過ぎを制止する機能を果たしている。

3. 「女性志願兵制」は国防庁が案の一つとして言及しただけで、実際その公式検討も 2011 年以降であり、また「女性志願兵制」はあくまでも「志願」であって「徴兵」ではないため、現在においては緊急の問題とはならないはずだが、オンライン上でジェンダー対立の様相を見せている激しい議論は、女性の兵役があたかも「徴兵制」に決まっているかのような雰囲気を作り出している。また、書き込みの時間も分刻みでつながっており、チャットのようにリアルタイムで書き込みがなされ（自分の書き込みに意見を述べた者に対し、すぐコメントしている）、具体的な内容においては議論がより活発に行われていることがわかる。

4. 書き込み数 10 以上のランキングにあがっている ID をみると、suwon****（39）、hairp****（18）、nor***（13）、musas****（11）の順に現れるが、彼らが掲示文に対して行った書き込みは多くて 2、3 回程度にとどまっている。すなわちより複数回の書き込みを行っている者の多くは、他人の書き込みに対して表出的な賛否を示している場合が多い。したがって、少数のネチズンだけが討議的な議論を主導しているわけではないことがわかる。

3-2　プライベート・イシュー

「女性と食事し、気に入らなかったので割り勘をしたが、これは間違っているのか！」

3-2-1　意見と論調の量的推移

この掲示文は、同じくプライベート・イシューである「174cm の女性と合コンをしました」という別の掲示文を閲覧した男性が、自分の経験を混じえながら意見を討議的に述べたものである。この掲示文は照会数が 75,179 回と多くの人々に見られ、また全体的に筆者の意見に対して賛成の意見が多い。すなわち、割り勘をすることに対して賛成する人が多い。

この掲示文に対する書き込み数は表 3 のとおりである。一般的な減り方を見せている。

表 3「割り勘」に関する掲示文の書き込みの推移数

日付	11/30	12/1	12/2	12/3	12/4
書込数	601	248	35	19	1

また本事例における基礎データは表 4、および図 3 のとおりである。

論調推移のグラフ（図 3）を見ると、全体的に反対が少なく、その変化もさほど大きく

[11]直接的に女性志願兵制に対して賛成、反対の意見を出張しているのではないが、韓国の女（男）はいつも○○だ、○○性質がある、等のような非難の言葉を述べることによって、志願兵に結びつけて考えさせる書き込みをしている。以下で出てくる割り勘の問題も同じである。違う話題において同じく男女間の問題、ジェンダーという形で捉えられた点はこれらのイシューを選んだ理由の一つである。

表 4　「女性と仕事し、気に入らなかったので割り勘をしたが、これは間違っているのか！」の書き込みに対する論調

書き込み数：904

賛成: 276(31%)		中立:521(58%)			反対: 74(8%)		その他
討議的賛成	表出的賛成	仲裁 (17%)	無関心 (21%)	ジェンダー (20%)	討議的反対	表出的反対	4%
80	196	153(29%)	190(37%)	178(34%)	22	52	33

論調について：「女性と食事する時、割り勘すべきだ」を「賛成」に、「女性と食事する時、男性が支払うべきだ」を「反対」に、また、主張の根拠が述べられている場合は「討議的」、単純に賛否だけを表明した場合は「表出的」とした。両論併記、客観的な指摘のような仲裁、イシュー直接かかわらない単なるジェンダーを巡る非難、および無関心も含め「中立」とし、このイシューとまったく関係ない書き込みは「その他」とした。

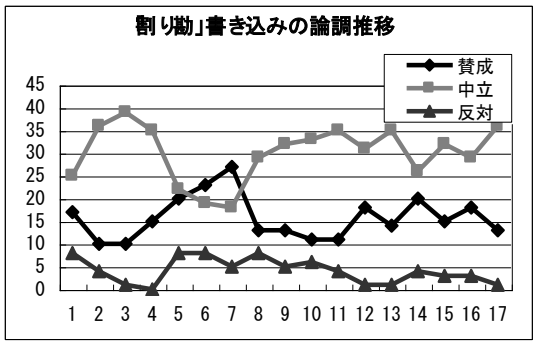

図 3「割り勘」書き込みの論調推移

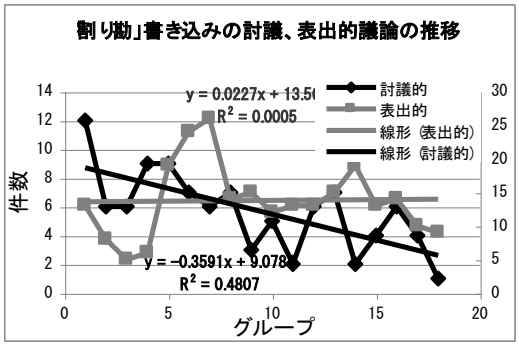

図 4「割り勘」書き込みの討議、表出的議論の推移

ない上に、徐々に少なくなっていく。議論の初期では、賛成書き込み数と中立書き込み数が相補的に振動するが、最終的には中立意見の書き込みが優位になっている。

また、女性志願兵制と同様、時間の流れに伴う書き込み件数をグループにした、議論の流れを見るためのグラフを図 4 に示す。本イシューとは関係のない「その他」を除いた 871 件の書き込みが対象になっている。横軸は 1 グループあたり 50 件ずつ刻み、散布図で現した。議論の傾向性を見るため、近似直線も求めた。討議的議論および表出的議論の書き込み数の顕著な差のため、縦軸を 2 軸にした（いずれも左軸が討議的、右軸が表出的である）。

図 4 のグラフを見ると、討議的、表出的議論共に不安定で、近似直線からわかるように、全体的に討議的議論は右さがり、表出的議論は水平に近いやや右上がになっている。したがってグラフにおいては討議による合意形成の傾向が見られなかった。

3-2-2　議論内容の連関

割り勘に関するこの掲示文において、討議的および表出的議論の量的な考察においては議論が収斂する傾向は見られなかった。しかし、参加者の相互関係などにおいてみると、以下のような結果が言えるだろう。

1．この掲示文の筆者は討論が行われる際、10 回以上も多くのネチズンとともに書き込みに参加し、自分の書いた文章に対するネチズンの理解を深めていた。更に、3 度も自分の考え方が理解し易いように、本文に補文を書いた。

2．書き込みの論調は中立が過半数を占め、賛成と反対もまた大きな差を見せている。時間の経過に伴う論調の流れをみると、反対意見が圧倒的に少なく、減っていく一方で、一つの反対意見に対して反駁する賛成意見が多く、賛否の衝突を見せる。中立の中身を見

ると、ジェンダーが 2 割を占め、ここでもジェンダー対立、特に一方的に反対派（女性側の立場）を批判する様子がうかがえる。現政府に対する批判といった議論の本筋から外れた意見や、一方的に偏った意見だけではなく、賛否のバランスをとるような自制機能をもつ書き込み（仲裁）が現れている。

3. 11 月 28 日の掲示文への書き込みの約 10%の内容が 2 日後の 11 月 30 日にまでつながっている[12]。意見を全体的に見ると、賛成意見と反対意見は比較できないほどの書き込み数の差を記録しているが、一方的な賛成派だけの議論が展開されるのでなく、中立意見が入り、徐々に自制機能を発揮している。他のカテゴリ（例えば討論などのアゴラのカテゴリ）まで議論が展開されることはなかったが、結果的に日常生活の中から生じたプライベートな一つの話題からもう一つの話題に移り、議論の対象も変わり行く（今回の事例の場合、両掲示文とも男女平等をめぐる話題だが、女性の身長に関する話題から割り勘の話題に変わる）様相を見せている。これは図 4 では見られなかったが、アゴラ参加者の相互関係において、アゴラ独自のリアリティを示すものと考えられる。

3-3　政治的イシューとプライベート・イシューの比較

これでは政治的イシューとプライベート・イシューをそれぞれ分析してきた。冒頭でも述べたように、韓国では、政治的イシュー（＝パブリック・イシュー）に関しては従来から多くの研究がなされ、当たり前のように公共圏をめぐる議論の俎上にのせられているが、プライベート・イシューは公共圏と結びつくものとして取り上げられることはなかった。プライベート・イシューも政治的イシューのように公共圏になり得るポテンシャルを持っているのかどうかを考察するために、ここでは政治的イシューとプライベート・イシューを比較することにする。

2 つの性格の異なるイシューを比較するにあたって最も顕著に見られたのは、2 つのイシューにおける議論が、具体的な掲示文の内容よりはイシューテーマをめぐってのジェンダー対立の様相を示したことであった。特に賛否の立場は逆だが、両方とも伝統的なジェンダー規範から出発した韓国社会における様々な慣習（例えば「食事代は男性側が支払う」、「重い物は男性が持つ」、「女性は軍隊に行かない」のような女性の弱者的立場が強調されたもの）をもって、一方的に女性を批判する書き込みがより多い。また、中立における「ジェンダー（ジェンダーを巡る非難）」という項目だが、いずれも高い割合を占めている。したがって、政治的やプライベートを問わず、イシューはある社会的風潮に従って議論されていることがわかる。

次に相違点としては、政治的イシューの話題に比べプライベート・イシューの話題の方が中立意見が著しく多く、また中立意見の中身を見ると、仲裁は同じぐらいの割合を占めているが、無関心は全体においても、中立内部においてもプライベート・イシューが占める割合がより多い。実際無関心の内容を見ると、プライベートにおいて人それぞれの考え方の違いを尊重すべきという発言が多い。また、無関心の割合が政治の方が低いことから、「韓国的」政治問題への市民のインターネット参加の背景を伺うことができる。

討議的および表出的議論におけるグラフでは、政治的イシューにおいて少しながら討議による合意形成が見られたが、プライベート・イシューにおいてはまったく見られないという結果に終った。しかし議論内容からは、仲裁による自制機能は両ケースともにおいて確認できた。またこれに加え、掲示文投稿者の積極的な議論への参加や大きく広がることまではなかったが、一つの話題からもう一つの話題へとつながっていく様子や、ニュース報道に影響され、短時間のうちにアゴラで激しい議論が行われ、事実ではない内容もあたかも事実になっているかのような雰囲気が作られることもあることから、アゴラの内部に

[12] 11 月 28 日の掲示文においては男女の付き合いにおいて身長が主な話題であるが、書き込みの中で約 10%が男女の付き合いにおける割り勘を話題にしていた。

コミュニケーションによって独自のリアリティが構築されているといえるだろう。
　政治的イシューに限らず、プライベート・イシューにおいてもアゴラ内部のリアリティが構築されており、それはアゴラという場が公共圏にもなりうるポテンシャルをそれ自体でもっていることを示していると言えるだろう。インターパーソナル・コミュニケーションが公共圏へと成長するメカニズムのより詳しい分析は今後の課題である。

参考文献

1) イ・ジェギュ（2008）：ウェブ 2.0 がもたらした新しい市民参加運動研究―2008 年牛肉協定反対蝋燭文化祭事例研究―，（学位論文）.
2) イ・チャンホ，ジョン・イチョル（2009）：公共圏としてのインターネットカフェ掲示板の可能性と限界,『言論科学研究』第 9 巻 3 号 pp.388-424.
3) オ・セウク（2009）：米国産牛肉波動とオンライン世論展開過程に関する研究：Media Daum の討論サイト「アゴラ」を中心に,（学位論文）.
4) キム・ゴンウ（2009）：Web2.0 時代のオンライン公論場としてのディシインサイドと Daum アゴラに対する研究　－ヨンサン惨事を中心に－,（学位論文）.
5) キム・テジン（2009）：オンライン世論形成の権力化過程に対する研究　－Daum アゴラとブログニュースのミネルバ事例分析を中心に－,（学位論文）.
6) グォン・サンヒとキム・イクヒョン（2008）：オンライン書き込みの認識と書き込み活動の関係に関する研究 - 書き込みの信頼度とインターネットニュース受容者の受容傾向を中心に - ,『韓国言論情報学会』No.42，pp.44-78.
7) 玄武岩（2005）：『韓国のデジタル･デモクラシー』，集英社新書.
8) ユン・ジェス,イ・ミンホ,チェ・ジョンホン（2008）：『新しい時代の公共性研究』，法文社.
9) ユン・ソンイ，ユ・ソクジン，ジョ・ヒジョン（2008）：インターネット政治参加と討議民衆主義：2008 年蝋燭集会を中心に，国家入法調査所.

参考サイト

1) ポータルサイト Daum　<http://www.daum.net>
2) Daum アゴラ　<http://agora.media.daum.net/>
3) 連合ニュース（通信社）　<http://www.yonhapnews.co.kr/>
4) 韓国経済新聞　<http://www.hankyung.com/>
5) DC ニュース　<http://www.dcnews.in/>

資料１　アゴラのトップページ

資料２　アゴラ掲示文の一例

掲示文：最初に書き込まれ、議論の題材になる文。

書き込み文：掲示文に対してネットユーザーが自分の意見や主張を述べたもの。掲示文に対して比較に短い。本文中では「書き込み」として表現している。

資料３　書き込み一例

beau-****　もちろん成熟した割り勘文化は定着すべきだ。男性が食事代を支払うべきだと思っている女性たちの曲がった認識も変えるべきだ。しかし、この掲示文で批判しようとしたのは、単純に男性が食事代を示すべきだという間違った認識から出発したものでなく、女性が気に入れば支払い、気に入らなければ割り勘をするという、心狭い考え方だったと思う。本当に男女平等原則に立って、はっきりした主観と行動で割り勘を主張する男性なら、気に入る女性であってもどうどうと割り勘を主張すべきだ。いわゆる先進国といわれる西欧国家でも年寄りと子供、女性を配慮するのは基本的なエチケットであり、礼儀として伝統的に受け入れられています。　09.11.30 11:51

↳ azaz****　あなたの書き込みに賛成です ^^ 09.11.30 15:38

↳ kazuyaka****　あなたの書き込みに共感を覚えました。中途半端な意識で割り勘を主張する人を見ると、笑いたくなります。先進化された国の文化を受け入れてもどうしますか。受け入れる者の意識が先進化されてないこの場合に... 09.11.30 12:00

↳ beau-****　もちろん女性の食事代を支払ってあげるのは、伝統と一脈疎通するという意味ではないが、相手の気分を配慮し、その程度はしてあげられるのではと思います。高額なら知らないが、女性の立場では振られるのに、食事代までというとすごい衝撃じゃないでしょうか? 09.11.30 11:54

↳ god****　書いた方も韓国人ですので、食事代を支払うことを知らないことはありません。しかし、本当にマナーのない女性にやられると、いやいや食事代を支払うことはイヤでしょう！西欧でも気に入る人に会えば、支払ってあげます。次、おごってくださいといいながら。09.11.30 12:06

↳ god****　上で書かれた方の文章を読んでみると、気に入らないというのに、初対面で「いくら稼いでいる？」「車は？」と訊問されるように聞く女性たちをみて、気に入らないというみたいだが、初対面でこのような話を聞き、食事代を支払いたい人はいない！ 09.11.30 12:15

↳ rovein**** しかし、気に入る女性なら割り勘しなくてもよいという言い方のせいで女性たちが反発しているのでは　09.11.30 14:58

↳ beau-****　私もそのような女の食事代まで支払うとは考えていません。相手が無礼なら、礼儀正しくしてあげる必要はないでしょう。しかし、それじゃないなら、状況は違ってくるでしょう。09.11.30 12:28

hb0***　絶対間違いでない。どうせ気に入らないから会う必要のない中だから、あえて払う必要はないでしょう?! つぎから思いっきりやって、ここには書かないでほしい~ 09.11.30 11:51

↳azaz****　次回から思いっきり様子を伺って割勘をすすめ、このような文章、ここにはもう書かないでほしいな?~ ククク 09.11.30 15:39

jh3****　間違い ~ 割り勘すべき. 09.11.30 11:47

yun****　反対を押しました。私の考えでは、食事代＝男性が払うべきという女性の間違った考え方に対して同感ですが、それがお見合いの場である以上、紹介した人の面子もあり、どうせまた会わない人だから、その日の食事代だけを支払うのが人としての礼儀のように思えます. . . 友達の面子で、初めて会った人に男性が紳士らしく食事代を支払いましょうという考えを持つ１人^^; 09.11.30 11:44

付録１　「女性志願兵制」と関係のある掲示文の日付ごとの掲示文数

日 付	掲示文数	日 付	掲示文数	日 付	掲示文数	日 付	掲示文数
2005/2/24	1	12/19	1	9/15	1	11/16	1
5/15	1	12/25	1	2008/3/24	1	11/17	2
7/17	1	12/26	1	12/16	1	11/18	2
7/24	1	12/27	1	2009/10/13	1	11/20	3
2006/7/30	1	2007/2/5	1	10/20	1	11/23	1
8/7	1	6/22	1	11/12	8	2010/2/3	1
10/10	1	7/10	3	11/13	7		
12/15	1	8/13	1	11/14	2		

付録２　「女性志願兵制」とかかわる事象、及びその経緯

1961 年～	軍卒者優先雇用開始
1969 年～	公務員採用試験にて軍卒者に対する点数加算制度（以下軍加算制）始まる。満点の約 5%が加算され、また部署選択可能。
1999 年 12 月 23 日	裁判所で違憲判決を受け、軍加算制廃止。背景に大統領直属女性特別委員会（現・女性家族部：部は日本の省にあたる）の役割が大きかったという。
2007 年	国防庁「兵役制度改善」推進計画を発表。
7 月 10 日	社会奉仕制度－2009 年より女性と受刑者、孤児なども本人が希望すれば、「社会奉仕」形式で兵役義務を行うことができる。 他、有給支援兵制、兵役奉仕期間の短縮、幹部比率の拡大などがある。
2008 年 2 月	ハンナラ党議員が軍加算制を発議、国会、国防部を通す⇒その是非について議論が巻き起こる。
2009 月 11 月 11 日	国防部、兵役資源不足などの理由で「女性支援兵」導入に関する法案を検討しているというニュースが流れる。
2009 年 11 月 12 日	国防部がウェブサイトにて、女性支援兵制に関して、2011 年以降に検討する長期兵役資源確保法案中の一つの代替案として言及されただけであって、公式検討は 2011 年まではないということを告知。国防庁の告知は、4 時間という短い時間の間に 7 千件を超える照会数を記録した。
2009 年 11 月 12 日～	ニュースでの報道に継ぎ、ネチズンの関心や反応はとても熱く、ネット上で様々な議論がなされる。インターネット上の記事に対し、半日で数千個の書き込みがあり、賛否設問調査は 5 時間の間に 1600 名余りが投票した。数時間の間にポータルサイト Daum にて実施された賛反投票においては 71.3%（1592 名）のネチズンが賛成した。 電話、インターネットなどを利用した設問調査も多く行われ、賛成の意見が圧倒的に多かった。電話―11.13 全国 19 歳以上の国民を対象に電話調査、賛成 63.2%、反対 24.4%、男性の賛成割合が 73%であるのに対し、女性は 53.8%と比較的低い。

2009 年度次世代研究「インターパーソナル・コミュニケーションを通した潜在的公共圏の形成と維持の研究 ―韓国のソーシャルメディア・カフェ「アゴラ」の事例から―」（研究代表：車愛順）による成果である。

【メンバー】（ ）内は 2009 年度プロジェクト時点

車　愛 順（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）
高橋　顕也（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）